

釧路湿原自然再生協議会
第 24 回 再生普及小委員会
議事要旨（案）

日時：平成 26 年 12 月 19 日 金曜日 13:30-15:30

場所：釧路地方合同庁舎 5 階 第 1 会議室

1. 開会
2. 議事
 - 1) 行動計画ワーキンググループ経過報告
 - 2) 環境教育ワーキンググループ経過報告
 - 3) 再生普及行動計画の見直しについて
 - 4) その他
3. 閉会

【議事 1. 行動計画ワーキンググループの経過報告】

【議事 2. 環境教育ワーキンググループ経過報告】

事務局 環境省 渡邊
経過報告

【議事 3. 再生普及行動計画の見直しについて】

久保田 委員（事務局兼務）
資料の説明

高橋委員長

分けながらご意見をいただきたい。

全体構想の見直しに伴って、これから新たな行動計画ができあがる。

大きく変わることは、今までは再生普及小委員会の中にワーキンググループを作って運営管理していたが、これからは再生普及小委員会そのものが管理運営していく形になる。

第 1 期の行動計画は 10 項目あって細かく分けて計画を立てていたが、今年までの第 2 期ではそれを 3 つにまとめ、第 3 期からはことばを整理して 4 つの項目にわける案になっている。

新庄 委員

今までは小委員会の委員長からワーキンググループに提案を要請していたが、これからは直接小委員会が行動計画の実施の検討をするという提案と理解する。

高橋委員長

ワンダグリンドの運営と報告書の作成に力を入れてきたが、大きく報告書を変更する予定である。

今まで参加していた個人や団体の方から「毎年似たような活動をしているがその度に同じ報告を書かなければならないのは大変である。」という意見があった。このため、毎年の活動は極めて簡単な報告で済ませて、5年毎に詳しく報告するという計画を考えた。

再生普及小委員会に参加する人と、行動計画ワンダグリンドに参加する人や報告内容も重複している印象があったため、この点も変えていくことも提案する。

渡辺 委員

ワンダグリンドの登録と報告を簡素化することは良いと思う。

ワンダグリンドの各活動を紹介するホームページがあると紙で毎回出さなくても良いのではないか。

高橋委員長

直接書かなくてもいいように、自分達の活動を紹介できるようなページを事務局側で用意することはどうかということか。

渡辺 委員

ほしい情報は活動日と参加人数であり、簡単な欄を用意することで良いのではないか。

新庄 委員

ワンダグリンドプロジェクトニュースがあるが、ネットで検索するとそのページに行き、予定や実施がその都度発信されている。それで補完できるのではないか。

高橋委員長

ネット検索で「釧路湿原自然再生協議会」と検索すると、複雑になっており見たいところになかなか行けなくなっている。これを、もっと簡単に見たいところにいけるようにすれば解決策になる。

事務局 環境省 渡邊

今再生普及小委員会のホームページがありそこから見られるようになっている。

高橋委員長

閲覧人数のカウントはあるか。

久保田 委員（事務局兼務）

表示はしていないが、カウントはしている。年間1万数千ぐらいである。

高橋委員長

年間で1万以上の方がみているので、もう少し工夫が必要である。

網倉 委員

毎年簡易な報告で、それを蓄積して5年間の報告書とするのか、それとも毎年簡易な報告はするけれども5年目に詳しい報告書を作るということとするということか。

久保田 委員（事務局兼務）

提案できるほど詰めてはいないが、毎年の報告は小委員会のニュースレターで活動を紹介してその他トピック的に紹介したいものがあれば写真などで紹介するというイメージで考えている。その他ご意見があればいただきたい。

5年間の報告書については、少なくともこれまで毎年作ってきた程度のものか、あるいは過去のものまで含めて作るかは企画するところまでは至っていない。

網倉 委員

5年毎ということについては、行政では担当者など2年間で変わってしまう。ボランティア団体などの代表が変わってしまう可能性のある場合は引継ぎをきちんとしないと5年前にさかのぼれない。

高橋委員長

毎年のものは極めて簡略なものとは考えているが、具体的には決まっていない。

ニュースレターはページが少なく、全ての登録されているワンダグリンダの状況載せるのは無理だと思う。新しく加わった活動とか特徴的なものを紹介するという形になる。

行政では転勤があるため、引き継ぐことで方向性が微妙に変わるかもしれない。そのことも考慮する必要がある。

この案は毎年厚い報告書は必要ないだろうということから出発しているが、それについてはどうか。

網倉 委員

それについては同感だ。

高橋委員長

きちんとした報告は5年毎ぐらいで、毎年には一覧表なり簡単なトピックの紹介で済ませていくという形を考えている。

渡辺 委員

5年間の報告書が誰向けで何を載せるのかが気になる。ただ5年間の活動を並べるだけでは意味がない。

5年間の報告書では、こういう活動が不足しているとか、面白い活動があるとか、のような分析や次の活動に参考になるようなものが載っていれば良い。

高橋委員長

これまでの報告書は毎年全てのことを載せているので重複していると思う。発信先は釧路市民であり1,000部以上を色々な所に配っている。

これは地域の人広めるための普及活動の一貫としての役目を持っており、今後も続けていかなければいけない。

久保田 委員（事務局兼務）

5年間のまとめで報告書を作るのであれば、当然評価にかかわる部分や、その先の見直しも必要になる。

全体構想の普及に関する項目に照らしてどこまでできたか、4つの項立てごとにきちんと分析して何が足りないかなどを書いていくことになる。

新庄 委員

ワンダグリンダの計画や参加の案内などを載せたニュースレターは出すということは明確にしておきたい。

今までは、ワンダグリンダの紹介について毎年印刷した資料を使っていたが、それが全く無くなると、新年度の参加案内の時に手持ちの資料がなくなる。そうであればそれに見合う資料を作れば良いということになる。

5年毎の資料は、5年間の取り組み内容や課題を含んだ報告書になり、今までの報告書とはずいぶん違うものになる。

これからは3種類の印刷物を出すことになるので、それらの性格付けをはっきりしておく必要がある。

高橋委員長

基本的には今まで毎年釧路市民に少しでも自然再生に対する関心を持ってもらうためのものとして報告書を作っていた。

毎年 1,000～1,200 部作っているが、現在残っているか。

事務局 環境省 渡邊

今年度については広く配っていないため残っているが、以前のものは大体さばききれている。

高橋委員長

参加を誘うためであれば、実施内容について過去の資料を見せることもできるのではないかな。もし残っていればそれを使っていけば良い。

事務局 環境省 渡邊

報告書以外にワンダグリンダがどういう活動をしているかを紹介した、パンフレットも作っているのだから、それを活用しながら広報していければと思っている。

高橋委員長

現在実際にワンダグリンダの活動をしている人に意見を伺いたい。

芳賀 委員

個人的には、報告書が 5 年毎では長すぎる。3 年ぐらいが良い。

高橋委員長

5 年毎でなければいけない理由はあるか。

久保田 委員（事務局兼務）

それは無い。行政も民間も 5 年遡って報告書を出せと言われるのは困るのではないかな。

各団体から 5 年分の報告出してもらうというのではなく、5 年間を総括するような報告書になると思う。

全団体の活動についてそろったものを作るのは難しく、それは 3 年毎でも同じではないかと考える。

3 年で中間的な分析をしてみて残り 2 年で何をするかを考えるということ是可以する。

5 年を通して何が成果としてあって何が課題かを分析できれば良い。

新庄 委員

作業の件を問題にしているのであれば、5 年目の見直しの作業にかかる前の資料にできる

4年がいいと思う。

1年毎の報告を5年毎のまとめに使えるようなものにするには、大変な作業になるのではないか。

それぞれ出すニュースレターを年度末に合本にして、前書きやまとめを付けて年報に代えるということで良いのではないか。そうすると作業量を減らすことができる。

久保田 委員（事務局兼務）

全体像は把握できると思うが、今のメールニュースは事業前の案内なので、実際に雨天で中止になったなどは反映されないし参加人数もわからない。

今はフォーマットを決めて事業者に感想まで書いてもらっているが、例えばメールや電話等で実施内容や参加人数の情報だけでも送ってもらえば、報告する側の負担も少ないのではないか。

書類を書くのが負担だという意見が多かったので、その程度の簡略化で良いのではないか。

1回登録すれば5年間有効であるが、実態が無くなることもあると考えられるため、毎年継続の確認は必要だと考える。

件数が多いと情報の確認方法を考えなければならないが、連絡を年1回取るのであれば、その中で得られる情報を集約できる。

その他に良い方法があればご提案いただきたい。

高橋委員長

何年くらいでどのような報告書を作るかまだ煮詰まっていない。持ち帰って事務局の宿題としたい。

芳賀 委員

基本的に毎年の方が楽なのではないか。

どう情報を集めるかの問題であり、整理もしやすい。

高橋委員長

資料 20 頁～22 頁のワンダグリーンダプロジェクトの一部変更等について了承していただけるか。

委員

（了承）

新庄 委員

資料 21 頁の「湿原で学ぶ、湿原を学ぶ Of the Wetland」は On the Wetland ではないか。英語部分はきちんと確認したほうが良い。

資料 23 頁の環境教育WGから（仮）学校支援WGへの変更（案）については、教材支援を念頭においているのか。

久保田 委員（事務局兼務）

主として流域の学校教育における湿原の活動を支援したい。

具体的には 3 つを考えており、1 つはモデル的に湿原を使った授業を実際にやることと教材を作って提供すること。2 つ目は、教員の湿原における研修機会を提供していくこと。3 つ目は、学校だけの授業実施が困難な時などに、ビジターセンターや博物館等、社会教育施設等と協力して授業を成立させたいということである。

高橋委員長

学校支援と言わないで学校教育支援というのはどうか。

少なくとも何も知らない人が聞いた時にイメージが持てないと困る。

これまで教員の研修を教育委員会とタイアップして行っている。湿原に触れてもらえる体験的な研修で非常に好評である。

学校の授業では、主に全国版の教科書を使っているが、その中の単元に対応する形で、釧路湿原をめぐる様々なことがらを使って地域の教材として開発し、学校に提供して先生に活用してもらうということは、これまでも実際にいくつか行われている。

本日、鶴居村で授業が行われた。

環境教育WG 事務局 山本

今日は、北海道教育大学、授業開発コース、境准教授が行った鶴居村の鶴居小学校と下幌呂小学校の 6 年生の合同授業に同行した。理科の授業で、湿原が昔海だったことを実際に地層から読み取っていく内容であった。

もうひとつは、大学 4 年生が行った算数の授業で、湿原の中で体を使って高さや広さを求めるという授業が行われた。

高橋委員長

参加するメンバーをどのように想定しているか。

久保田 委員（事務局兼務）

23 頁にあるが、実践していただける学校の先生、教育委員会といった現場の関係者、加えて協力してくれる団体 機関やアドバイスをもらえる有識者等が想定される。

高橋委員長

以前の学校教育のワーキンググループを立ち上げた時は、委員会が学校教育の中身を知らなすぎるとい壁に突き当たった。

これからはワーキンググループと学校の現場との掛け渡しをしてもらえる学校の先生を探さなくてはいけないし、再構築しなくてはいけない。

鶴間 委員

ワーキンググループの名称について、北海道教育大学が取り組んでいる「E S D」を使えば大学関係者を集めやすいのではないか。

高橋委員長

以前よりは大学関係者の関わりが多くなってきている。

鶴間 委員

環境教育に大多数関わっているのは教育大学の方々が多いと思い、タイトルに「E S D」を入れることで、関係者を集めやすいかと思ったが、少し違う分野に入ってくるか。

高橋委員長

教材開発の先生が協力して釧路湿原の授業をするなどや、それに関わった学生たちがテーマにした卒業研究をするなど少しずつ取組が進んでいる。以前に比べればその取組は随分進んでおり、より促進するということになる。

23 頁の寄付金の基金化についてであるが、協議会への寄付金の運用について、中村会長から再生普及小委員会で検討するよう言われている。

話が進まない事情が色々あり、中村会長には、すぐに次の協議会で提案するという事は難しいという報告をし、了解を得ている。

現在 81 万円ほどの寄付金があり、毎年数万円規模で増えている。

学校の環境教育の支援、例えば学生とたちを湿原へ誘うための交通バスのチャーターなどに使えないかというような話が出ているが、毎年数万規模でしか入ってこないため一度のイベントで使いきってしまう可能性がある。

基金を本格的に制度化するためには、基金の募集を行うことや、毎年ある程度の基金が回転していかなければいけない。

阿蘇では、釧路湿原とは桁違いの寄付金の集め方、運用の仕方をしている。

基金化して規定を整備し、民間による自然再生活動への助成、学校の湿原訪問への助成、調査研究への奨学金として利用してはどうかと提案がされている。

寄付金を基金化するには、事務局や担当を決める必要がある。新たにできる（仮称）行動計画ワーキンググループで検討するべき、もしくは新たにできる湿原再生協議会で提案を

するという提案である。

新庄 委員

次年度に行動計画ワーキンググループというのを立ち上げるのか。

寄付金について普及再生小委員会へ提案するための案を検討するためのワーキンググループを作り、そこで検討した内容を再生普及小委員会にかけて検討し、協議会へ戻すといったためのワーキンググループか。

久保田 委員（事務局兼務）

そうである。寄付金の基金化の他にも、やり方や具体的な事務レベルの話も含めて検討すべき事例が出てくると考えられるため、それらを検討する器として（仮称）行動計画ワーキンググループ作るということである。

新庄 委員

行動計画ワーキンググループという名前はわかりにくいためやめたほうが良い。

高橋委員長

新しく再生普及小委員会が立ち上がった時点でワーキンググループを立ち上げるかどうか、名称も含めて検討する。

久保田 委員（事務局兼務）

名称は変えても良い。基金の話だけではなく、他にもその場で再生普及小委員会として検討しなければならないことを詰めるテーマが出てくる可能性がある。それをまとめてディスカッションする場としてのワーキンググループという位置づけを考えていた。

新庄 委員

寄付金の基金化と活用について検討するワーキンググループということだけでなく、色々なテーマをこの行動計画ワーキンググループで検討するということになると、また新たな提案になるのではないか。

一旦解散すると言っている行動計画ワーキンググループについて、次の段階のイメージができていくことになる。

久保田 委員（事務局兼務）

新年度の再生普及小委員会で体制や名称を含めた議論をする。

井上 委員

基金として制度化するのであれば募集などが必要である。ただし、目的や必要性を明確にする必要がある。

高橋委員長

目的や必要性について検討する必要がある。

柏谷 委員

どのような目的で募集したのか。それと大きく外れることは、善意のものを裏切ることになる。

現在の金額では、資料を作るくらいが精一杯である。

学校教育支援などに使われる共有フォーマットを作るというのはどうか。

募る方法については、目的さえはっきりしていれば、集める場所を提供できるかもしれない。例えば、釧路湿原の授業のPRの際に善意での協力をお願いすることはできる。

高橋委員長

現在の金額は、募集していないのに集まったものである。

釧路湿原再生協議会が立ち上がった際に応援していただいたものである。

特にある目的に賛同するというよりは、漠然と釧路湿原の自然再生を応援したいという一つの意思表示である。

基金を募る担当を設けるかを含めて考える。

新庄 委員

この基金については、新年度、再生小委員会の中でワーキンググループを立ち上げて検討するという方針で良いと考える。

高橋委員長

単発で終わるのではなく、将来の見通しや、持続可能な資金の循環計画や使い道、集め方を考えたい。

いくつかの団体の活動について資料を少し集めており、それらを参考にしながら考えたい。

西山 委員

それは、「行動計画ワーキンググループ」とは別ということか。

高橋委員長

名称が行動計画ワーキンググループとなるかは未定である。

現在ある行動計画ワーキンググループは、まもなく解散になる。新年度に再生普及小委員会が新たに立ち上がった時点で、その中にワーキンググループを設けるかどうかから検討する。

西山 委員

必要があれば新たに設置する「行動計画ワーキンググループ」（仮称）で、基金についても話合う可能性があるということか。

高橋委員長

非常に時限的な短い期間だけのワーキンググループを立ち上げて、そこで集中的にやる方が効率的なのかどうかも含めて考える。

西山 委員

基金が少額であるのは、積極的に寄付を募っていないからでもある。まず積極的に募るかどうかから考えるべきである。

「再生事業を進めるために必要なお金があるが、それは行政が出せない種類のものであり、寄付金さえあれば効果的に進む」というような事情があるのなら積極的に募るべきである。

個人的には現在の釧路湿原自然再生事業においてはそのようなものは見えていないのだが、もし（そのような事情が）無いのであれば、「今後も積極的にには募らない」ということも選択肢に含めて検討するべきである。

高橋委員長

釧路湿原自然再生協議会として基金を募ったり、基金について考えたりしたことは一度もない。この機会に今後どうすべきか新たに設置予定のワーキンググループで考えることとしたい。

次に、自然再生普及行動計画（案）について議論したい。

久保田 委員（事務局兼務）

これまで行動計画ワーキンググループではワンダグリンドを中心にやってきたが、今後は小委員会で行っていくという提案である。

基金や小さな自然再生のようなものをどのように広めていくかなど、色々な課題についてワーキングをしておいてじっくりと話すということであれば、それに特化したワーキングを作れば良い。

そうでなければ、例えば枠だけを設置し、様々なことを検討した上で小委員会に案を上げるという仕組みにすれば良い。名称については未定であるが、何らかの形でそのような事柄を検討するワーキングは継続すると考える。

渡辺 委員

30 頁「3 具体的な取組分野」「3-1 湿原にふれる、楽しむ」という感覚的な項目に対して、後の文章は、協議会が行うことが書かれてあり、その齟齬があるように感じる。

30 頁②「湿原の今を伝える」、③「自然再生の今を伝える」というのは、「3-2 湿原で学ぶ、湿原を学ぶ」に書くべきことではないか。学習要素以外の「ふれるや楽しむ」感じが全くしない。そのため 3-1 のタイトルだけ見るとすごく違和感がある。

全体構想では、普及と教育と参加という 3 つに分けた取組に対して、こちらでは 4 つになっているためわかりづらい。

第 2 期の時には、解説の頁が一枚入っていた。今回はそれがなく、いきなり「3 具体的な取組分野 3-1 湿原にふれる、楽しむ」となっており、ここの部分は少し整理されたほうがわかりやすい。

高橋委員長

つなぎの部分を用意したほうが良い。

「ふれる、楽しむ」という感覚的なことばを使った部分で、今を伝えるという表現が学ぶに近いイメージがあると私も感じていた。

むしろ大胆に湿原の今にふれる、自然再生の今にふれるなどの表現で良い。

久保田 委員（事務局兼務）

②、③はこのままだと「3-2 湿原で学ぶ、湿原を学ぶ」にあったほうが良いような内容になっており書き換える。

取組分野の考え方を設けたつなぎを作成する。

高橋委員長

釧路湿原自然再生について知識のない若い人たちにも理解されるような作り方が必要である。

新庄 委員

30 頁から 33 頁については、「3 具体的な取組分野」で「3-1 湿原にふれる、楽しむ」といった後に、具体的に書いている一文が良い。

あえて①②③と無理に文章にする必要は無い。

湿原にふれる、楽しむや学ぶなどということが、どういうことなのかを文章でわかりやすく書いておけばそれで十分である。整理して簡単にすべきである。

久保田 委員（事務局兼務）

行動計画という名前である以上、協議会として次の 5 年間でやることを具体的に書いておくべきだと考えた。

秋山 委員

33 頁の「3-4 湿原と地域をつなぐ」の「自然再生による地域づくりへの貢献を目指します。」や「①地域産業との連携」という部分は、これから作る産業振興の取組とラップしており、上手く住み分けしたほうが良い。

久保田 委員（事務局兼務）

34 頁にあるように、普及小委員会が行動計画を使って進めようとしているものは 5 つの技術的な委員会だけではなく、地域振興の委員会も含めて協議会の取組として普及をしていこうという考え方のもとに作った。

地域振興での取組については、ここでどこまで書き込むかということもあるが、普及の延長にあることとして書くべきである。

前回の行動計画では、地域振興や地域づくりに、どのように関わっていくかということが課題であり、新しく小委員会を作って計画を進めようとしている。

この行動計画を通してぜひ普及していきたい。

新庄 委員

「この部分はこの小委員会を意識している」ということを明確にしたほうが良い。「3-4 湿原と地域をつなぐ」は普及振興小委員会を意識している。「ふれる」というのは、水循環小委員会などを意識しているなどと、はっきりさせることにより、小委員会と普及再生小委員会と一緒にやっているということが明確になる。

久保田 委員（事務局兼務）

30 頁「3 具体的な取組分野」の前に、具体的な考え方について書くことにする。

秋山 委員

小委員会は何がニーズで、どんなことをしてもらいたいのかを上手く聞き取りして、反映していった方が良い。

高橋委員長

ことばづかいについては、多少変更がおこることをご了解いただきたい。

事務局 環境省 中島

具体的な取組について、プロジェクト単位で書くことはできないか。

こういう目的でワンダグリンダプロジェクトをやる、学校教育を支援するなどの表現にしてはどうか。

現在の記載は、具体的と言いつつ具体的ではないし、同じことが何度も書かれているように見える。

久保田 委員（事務局兼務）

どの事業を 5 年先まで具体的に続けられるかが書けないため、ここでは方針としての記述をしている。

事務局 環境省 中島

行動計画であれば固く考える必要はなく、わかる範囲で良いのでは。

高橋委員長

プロジェクトというのとは一番わかりやすい。

ただし、時間的なことや、これまでのいきがかりからはあまり離脱できない。

中身に関しては重複していたりするため、様々なことを簡素化できないか考えてみたい。

本日議論した問題点について調整し、全体構想と再生普及の行動計画案に反映させ、自然再生協議会にかけることで了解していただきたい。

【議題 4. その他】

事務局 環境省 杉本

今年 10 月の自然再生協議会で、「勝手に褒めましょう」という提案について、この場で意見をいただき、取りまとめていただきたい。

高橋委員長

自然再生表彰、仮称であるが「勝手に褒めましょう」の目的は、釧路湿原再生協議会の協議会員および協議会に所属していない組織や個人が行っている自然再生に資する取組を表彰し広く公表することで、自然再生の更なる取組や自然再生に対する関心を促す一端とするというものである。

自然再生に資する取組を行う組織 個人（複数可）、自薦または他薦による自然再生の取組を公募し、選定委員会で表彰者を決定する。

他薦については、対象者の了解を得た取組のみを表彰の対象とする。

選定委員会として協議会の会長および事務局、各小委員会の委員長および事務局で選定委員会を作る。

事務局 環境省 中島

行政が行っている取組以外をどうしたら広げられるかということから出た提案である。
難しく考えずに、緩やかにこのようなことをやってみてはどうかという提案である。

高橋委員長

釧路湿原の自然再生になんらかの形で協力してくれた方や、その活動に参加して下さった方などを自薦他薦で選んで表彰するというものである。
表彰というのは例えば賞状出すとかいうようなことか。

事務局 環境省 中島

賞状であればすぐ出せる。副賞などが作ればそれも良い。

高橋委員長

思い浮かぶのは、先ほどの基金の有効な活用であるが、そういうようなことも場合によっては考えられるか。

事務局 環境省 中島

皆さんの議論の中で合意が得られれば良い。

高橋委員長

前回の自然再生協議会が終了後に提案されたものであり、中村会長から再生普及小委員会で検討するよう託された。ご意見を伺えればそれをもとに考えてみたい。

鶴間 委員

取組としては良いと考える。

基金からのお金を研修などに有効活用するなどの流れを作るというのも良い。

次年度に新たに立ち上がるかもしれないワーキンググループや再生普及小委員会で検討すべき事項に加えていただきたい。

白谷 委員

賛成である。

これを公募するなどして関心を高めても良い。

芳賀 委員

選定の仕方や、誰がどう選定するのが難しい。選定委員会を作るなどして進むしかない。
ワンダグリンダに過去何年間の参加実績があるかなどから始めてはどうか。

高橋委員長

これは自然再生協議会が実施して表彰するという形である。

再生普及小委員会ではワンダグリンダの参加者に対して表彰状を出していたが、それとはまた違う。途中で種切れにならないようにするべきである。

新庄 委員

会長に一任で良い。

選定理由を会長が説明できる程度のレベルで良い。それ以上難しく考えると、選定基準や選定されたメリットについても考える必要が出てくる。

次年度に改めて時間をとって議論した方が良い。

井上 委員

あまり深く考えてしまうとできないのではないか。軽い気持ちでやった方が良い。

高橋委員長

新しく小委員会が立ち上がり、そこで何らかのワーキングができた時点で、そこが基本的に考えて議論していく。その議論の中身に関していうと、あまり深く考えると大変になる。それらを考慮して検討してみたい。

秋山 委員

産業振興小委員会を新たに設立するという事で、漁組からいただいた資料を紹介する。

漁組が委員長で、北海道、林野庁、農業などが入り組織され「豊かな緑と魚のリバーサイド植樹活動」という活動が行われている。

釧路川の恩恵を受けている漁業者や農業者を始め、そこに暮らす住民が自らの手で河川周辺に植樹をすることにより清らかな釧路川水系の回復と、森林の大切さの普及啓蒙を促すことを活動の趣旨としている。

この活動を今後ワンダグリンダの取組に登録していただきたいと考える。

この植樹活動実績が20年にも及ぶことから、販売する釧路ししゃもや鮭に貼る自然再生協議会の認定シールを協議会として与えて、商品価値を上げるなどの連携をはかることをぜひご検討いただきたい。

高橋委員長

検討課題として新しくできたところで検討するよう申し送る。

秋山 委員

釧路開発建設部では、川を学ぶ、道路を教えるなどの学校教育支援的な活動を行っている。
今回、光陽小学校の3年生向けに出前授業を行い、再生普及よりご協力いただいた湿原の
成り立ち模型を利用し、パワーポイントの作成をするなどをして対応した。
子どもたちに非常に興味を持ってもらえた。
情報共有と連携の事例として報告させていただく。

高橋委員長

他の小学校などから要請があれば出前授業をしてもらえるのか。

秋山 委員

釧路開発建設部として、このような項目であれば出前講座するとホームページでもアップしている。

高橋委員長

雑談で小中学校の先生などに紹介してもよいのか。

秋山 委員

結構である。

事務局 環境省 杉本

これにて第24回再生普及小委員会を閉じる。

=閉会=